書籍紹介

The Routledge International Handbook of Early Literacy Education: A Contemporary Guide to Literacy Teaching and Interventions in a Global Context

Natalia Kucirkova, et al eds, London; Routledge, 2017, 392pp

加藤　映子

人間には、一定の言語環境の中で養育されれば、学校に通わずとも母語の話しことばを習得できるメカニズムが備わっている。一方で、文字は人間が発明したものであり、話しことばのように習得できるとは限らない。しかも、ある文字が生まれて完成されていく過程の背景には、政治的な要因が存在していることもある。

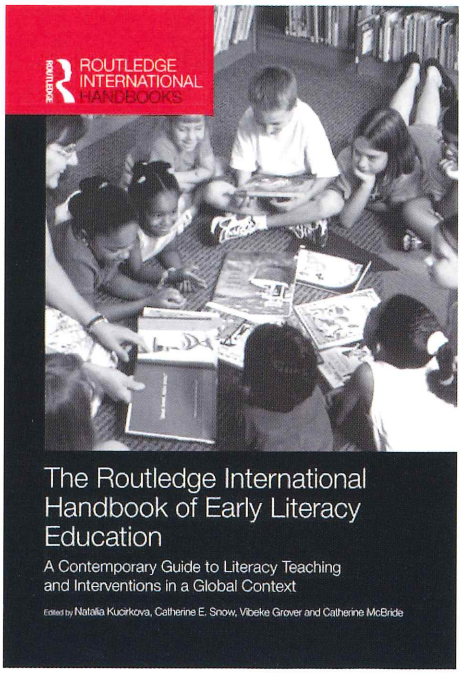
例えば、朝鮮半島で使われているハングルは、漢字表記では一般国民に情報を配信できないと考えた朝鮮王朝第四代国王世宗が、学者たちに開発させた表音文字である。

では、どのようにして人は文字を習得し、読み書きができるようになっていくのだろうか？　日本語を例にとると、ひらがなは、4-5 歳の幼児でも認識したり読んだりすることがある。そして、漢字は、基本的に小学校で学習を始めてマスターしていく。ところが、残念なことに、世界のすべての子どもたちが日本と同じように読み書きを習得できている、というわけではない。また、グローバル化の中で、母語ではない言語環境で就学せざるをえない子どもたちもいる。

日本では考えにくいかもしれないが、地球規模で考えると、就学していない児童や初等教育レベルでドロップアウトしてしまう生徒も少なからず存在する。そして、読み書きができなければ、学校のみならず、情報や社会からも取り残されることにも繋がりかねない。

今回ご紹介する "The Routledge International Handbook of Early Literacy Education: A Contemporary Guide to Literacy Teaching and Interventions in a Global Context (Edited by Natalia Kucirkova, Catherine Snow, Vibes Grover and Catherine McBride)" は、ことばをめぐるそのような環境の中で、特に１）識字の指導がどのように行われているか、２）さまざまな言語の正字法がどのようなものであるか、３）個々の国における教育のシステムはどのようなものか、という３つの観点から、言語的ダイバーシティをまとめた労作である。

この書籍は３部構成を採り、まず第１部では、識字とは何か、また、識字が子どもに何をもたらすのかについて、その研究分野の第一人者たちの洞察がまとめられている。また、第２部では、14 の国と地域における初期の識字の準備、実践、政策が語られ、未就学児から小学２年生までの識字と教育についての概要を知ることができる。さらに第３部では、識字教育への主な介入事例とその研究を裏付ける実践について語られ、リーディングとライティング能力、語彙、音声の認識、そしてナラティブ（お話）を語るスキルの研究事例が紹介されている。



ちなみに、この書籍の第２部のさまざまな言語の事例における日本のセクションは、私が担当しており、幼稚園と保育園でどのような読み書きのための取り組みが行われているかをテーマに、幼稚園教育要領や保育要領、認定こども園教育・保育要領を参考にして執筆した。そこには、小学１・２年生の学習指導要領を元に、初等教育の教員が実際使っている補助教材についての情報も含まれている。

私自身、母語である日本語のひらがなの習得についての確たる記憶はないものの、ある出来事は、はっきりと覚えている。当時住んでいたアパートの鉄製のドアに、拾った釘で自分の名前を書いたのだ。それは、そのアパートから引っ越しをしたのと同時期の、５歳前後のことだったかと思う。本来は「かとうえいこ」であるべき名前を、「かとうえこい」と間違って記した落書きを見た両親は、しばらく「えこいちゃん」と呼び続けたのであった。これは「早期識字」と呼ばれる子どもの能力だが、しばしば意識せずにこのような誤りが生じることがある。

しかも、日本語はひらがなに留まらない、非常にユニークな正字法を持っている。識字能力が深まるにつれて、カタカナや漢字も交えて書き言葉を表現することになり、さらにローマ字や英単語なども文章の中に使われるようになっていく。しかし、だからこそ、日本語を母語とする子どもと、母語としないが日本で就学する子どもとでは、異なる書き方をマスターする必要も生じてくる。

本書は、このように重層的で複雑な構造を持つ日本語の環境下で、さまざまな状況に置かれた子どもたちはもちろん、母語で教育を受けていない生徒を担当する教員、そして、識字を研究する研究者にとっても大いに役立つ一冊といってよいだろう。